



ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL
グリム兄弟 Bruder Grimm

宇敷かな：朗読

楠山正雄：訳

映像術：リライト Rev.2

底本

『世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人』小峰書店 1949（昭和24）年発行（青空文庫より）

その一

貧しい木こりの男が、大きな森の近くの小屋で、母親と二人の子供とで暮らしていました。子どもの名前はお兄ちゃんがヘンゼルで、妹がグレーテル。

ある年、国じゅうが大飢饉で、食べるものがほとんどなくなりました。木こりは晩に、寝床ねどこに入ったものの、これからどうやって暮らすか考えると、心配で心配で眠れず、奥さんに話しかけました。

「おれたち、これからどうなるというんだ。かわいそうに、子供らをどうやって食わしているか」

「おまえさん、いつそ二人で暮らそうじゃないか」と、奥さんがこたえました。

「あしたの朝、子供たちを連れ出して、森の奥の奥の所まで行くのだよ。そこで、焚き火をしてやって、ヘンゼルとグレーテルにパンを与えて、ふたりをそっくり森の中においてくるのさ。」

「そりゃあ、おめえ、いけねえよ。」と、木こりがいいました。

「そんなこたあ、おれにはできねえよ。子供らを森ん中へおきざりにするなんて、どうしたって、そんな考えになれるものか。そんなことしたら、子供ら、すぐに獣がでてきて、ズタズタにされてしまうじゃないか。」

「やれやれ、おまえさんはバカだよ。そんなことをいっていたら、わたしたち四人が四人、みんな死んでしまうよ。」

奥さんは説得を続け、終いには亭主に「うん」と言わせてたのです。

実は、ふたりの子供たちもお腹が空いていて眠れなかったので、母親が父親に言っていることを、そっくり聞いてしまっていたのです。妹のグレーテルは涙を零しながらヘンゼルに「どうしよう、あたしたち、もうだめだね」と嘆きました。

それを聞いたと兄は「しッ、静かにしてグレーテル、大丈夫、ぼくが上手くやるから。」と慰めました。

親たちが寝静まると、ヘンゼルは起き上がり上着を着ました。そして、おもての戸の下だけあけて、こっそり外へ。ちょうどお月さまが、昼のようにあかるく照っていて、家の前にしいてある白い砂利が、銀貨のようにキラキラしていました。ヘンゼルはかがんで、その砂利を上着にいっぱい、つまるだけつめて、床にもぐりこみました。

夜が明けると、まだお日さまのあがらないうちから、母親が起きて来て二人に「さあ、おきないか、息け者だね。おきて森へ行って、薪木を拾ってくるのだよ。」こう言って、母親は、子供たちめいめいに、ひとかけずつパンを渡すのでした。

準備ができると親子四人そろって森へ出発。しばらく行くとヘンゼルがふと立ちどまって、首をのぼして、家のほうをふりかえりました。そんなことをなんべんもなんべんもやりました。それに気づいた父親が「おい、ヘンゼル、何をそんなに立ちどまって見ているんだ？ うっかりしないで、足もとに気をつけろよ。」

ヘンゼルは答えました。「ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あそこの屋根の上に、ぼくの白猫があがっていて、バイバイしているから。」

実は、ヘンゼルは白猫なんか見ているのではありません。本当は、夜に拾っておいた砂利を少しづつ道に落としていたのです。

しばらく歩いた後、父親がいました。「さあ、子供たち、薪木^{たきぎ}をひろっておいで。みんな、寒いといけない。焚き火をしよう。」

ヘンゼルとグレーテルは落ち葉や枝をを運んで積みあげました。火をつけると、ぱあっと高く炎がもえあがります。

すると母親が「さあ、子供たち、ふたりは焚き火のそばであつたいなさい。私たちは森で木を切ってくる間、おとなしく待っているのだよ。仕事^{しごと}が済んだら迎えに来るからね。」

ヘンゼルとグレーテルは、そこで、焚き火にあたっていました。お昼になると、めいめいあてがわれた、パンの小さなかけらをだして食べました。兄弟は、いつまでもおとなしく座って待っているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、ぐっすり寝てしまいました。

しばらくして目がさめてみると、もうすっかり夜。グレーテルは、帰りたい、と泣きだしてしまいました。ヘンゼルは妹をなだめて「なあに、しばらく待とう。お月さまが出てくるからね。そうすれば帰り道が見つかるだろう。」と言いました。

やがて、まんまるなお月さまが、高だかと昇りました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手をひいて、砂利を落としたところを、たどり歩きました。たくさんの小石は、真新しい銀貨^{みちしるべ}みたいにピカピカ光って道標^{みちしるべ}になっています。

兄弟は歩き続けて、やっと自分たちの家に到着しました。

二人を見た母親が「いつまで森の中で眠ってたんだい。おまえたち、もう家へ帰るのが嫌になったんだと思ってたいたよ。」と驚きを隠し、父親のほうは、よく帰ってきた来た、と喜びました。

しかし、しばらく経ったある日の深夜、母親が父親へ話しているのが聞こえます「さあ、いよいよ食べつくしてしまった。残りはパンが半きれだけ。こうなりややっぱり子供たちを追い出すほかないよ。こんどは森のもっと奥の奥まで連れて行かないとダメさ。他に私たち助かりようがないからね。」

こう言われた父親は少し反論しましたが、母親はまるで耳に入れようともしません。両親の寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルは砂利をひろいに行こうとしました。でも、今度は鍵がかかっていて外へ出ることができません。

あくる日は、朝っぱらから母親がやって来て、子供たちを寝床から連れ出しました。子供たちは、めいめいパンの欠片かけらをひとつずつもらいましたが、とても小さいものでした。

森へ連れて行かれるなかヘンゼルは、小石の代わりにそのパンを細かくくずして、道に落としていきました。この間よりずっとずっと深い森まで連れてきて、こんどもまた焚き火をはじめます。

「さあ、子供たち、二人ともそこにじっといればいいのだよ。くたびれたら寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木をきって来て、夕方、仕事がおしまいになれば、戻って来て、一緒に家につれて帰るからね。」と、母親に言われました。

お昼になると、グレーテルは自分のパンを、兄とふたりで分けました。食べ終わると、ふたりは眠くなりそのまま休みました。

ふたりが目覚めたときは、もう真っ暗な夜。ヘンゼルは、怖がった妹を気遣いました。「まあ待とう。お月さまが出るまでね。お月さまが出れば、落としたパンくずも見えて、それを探して行けば、家へ帰れるんだよ。」

お月さまが昇って出発したのですが、道標みちしるべのパンくずは、もうどこにも見あたりません。それは、森や野を飛び回っている鳥たちが、啄んでしまったのです。

それでも兄は「なあにそのうち、道はみつかるよ。」とグレーテルに安心させようとしたのですが、やはり迷子になりました。夜中じゅう歩きとおしても、森の外へ出ることができません。それになにしろお腹がすいてたまりません。

もうくたびれきって、どうにも足が進まなくなったので、大きな木の下にごろりとなると、そのまま寝こんでしまいました。

その二

ちょうどお昼ごろ、雪のように白いきれいな鳥が、枝にとまって、とてもいい声で囀っていました。あまりにいい声なので、ふたりはつい立ちどまって、うっとり聞いていると、そのうち囀りをやめて羽ばたきました。兄弟もその鳥の飛ぶほうへついて行くことにしたのです。

すると、かわいい小屋がありました。なんと、この小屋はパンとお菓子でできています。ヘンゼルが「けっこうなご飯だ。かまわない、たんとご馳走になろう。ぼくは、屋根をかじるよ。グレーテル、おまえは窓を食べるといいや。ありゃあ、甘いよ。」ヘンゼルはうんと高く手をのばして、屋根を少し取って、どんな味がするか口にしました。グレーテルは、窓ガラスをボリボリかじりました。

その直後、小屋の中から声が。

「もりもり がりがり かじるぞ かじるぞ。
わたしの小屋を かじるな だれだ。」

とてもお腹がすいていたヘンゼルとグレーテルは、それでも食べ続けます。ヘンゼルは屋根がとてもおいしかったので、大きなやつを一枚そっくりめくってムシャムシャ。グレーテルは、まるい窓ガラスをそっくりはずして食べました。

今度は戸があいて、お婆さんが杖をついて、のさのさ出て来ました。兄弟は驚いて、せっかく両手にかかえたものを、ぽろりと落とします。お婆さんはこう言いました。「やれやれ、かわいい子供たちや、誰に連れられてここまで来たかの。さあさあ入って、ゆっくりお休み。」

兄弟が中へ入ると、牛乳や砂糖のかかった焼きまんじゅう、リンゴ、クルミとおいしそうな食べ物がテーブルにたくさん。これらを全部ご馳走してくれました。

しかし、このお婆さんが親切なのは上辺だけ。ほんとうは悪い魔女で、子供たちの来るのを知って、かわいい小屋を作っておびき寄せたのです。子供が手に入ったが最後、煮て食べようとしているのです。

魔女は、たちの悪い笑い方をして「よし、つかまえたぞ、もう逃すものかい。」と、叫びました。

そのあくる朝の早く、まだ目をさまさない兄弟を見て「こいつら、とんだごちそうだね。」と、つぶやきました。やせ枯れた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな犬小屋へ連れて行って、ぴっしやり格子戸を閉めます。それから魔女は、またグレーテルを揺すぶり起こし、「このナマケモノ、さあおきて、兄さんに何でもおいしそうなものを、こしらえてやるんだ。太って脂がのったところで、私が美味しく食べるのだ。」と、不気味に笑いました。

グレーテルは、わあっと、はげしく泣きました。けれど何をしたらって無駄でした。このたちの悪い魔女のいいなり放題、どんなことでも、しなければなりませんでした。

まい朝まい朝、お婆さんは犬小屋へ向かい「どうだな、ヘンゼル、指をだしておみせ。そろそろ脂がのってきたか太ってきたか、みてやるから。」と、わめきました。すると、ヘンゼルは食べ残りの細い骨を、指の変わりに出しました。魔女は目が悪いので見わけがつかず、骨をヘンゼルの指でないことに気づきません。

ひと月経っても、あいかわらずヘンゼルの指は細いままだ、と魔女は不思議に思っていたが、とうとうしびれをきらして、待ちきれなくなり「もう太っていようが、やせていようが、なにがなんだって明日こそ、ヘンゼルを煮て食っちゃおう。」

あくる日は朝から、グレーテルは外へ出て、水をいっぱいはった大鍋をつるして、火をもしつけなければなりませんでした。魔女が「パンからさきに焼くんだ。焼き釜はもう火がはいっているし、パン生地もこねてあるだろう。」とグレーテルを釜の方へ連れてきました。

「釜なかへ運びみな。火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパン生地を入れるからな。」これで、もし、グレーテルが中にはいれば、窯のふたをしめてしまうつもりだろう、とグレーテルは魔女の企みに気づきました。そこで「あたし、分からない、どうしたらいいんだか。中へはいるって、どういうふうにするの。」と聞きました。

魔女は腹を立てながら「こんなに大きいじゃないか、目をあいてよくみろよ。このとおり、私だってそっくり入れらあな。」と窯の中に首をつっこみました。ここぞとグレーテルは後ろからドンと精一杯押しました。はずみで魔女は、窯の中へころげこみます。透かさず鉄の戸をぴしんとしめて、カンヌキをしました。

こうして妹は、魔女を退治した後、まっしぐらにヘンゼルのいる所へ「ねえヘンゼル、私たち助かったよ。魔女のお婆さん死んじゃってよ。」と言い、格子戸を開けると、とたんにヘンゼルが、鳥がかごからとび出したように、ぱあっととび出して来ました。

「さあ出発しよう。」と兄は言いました。「ともかく魔女の森からぬけ出さなくては。」

2、3時間歩いて行くうちに、大きな川に着きました。「これじゃあ渡れやしない。橋もイカダも渡るものがないや。」すると、グレーテルが「でも、あそこに白い鴨が泳いでいるわ。」と言い、鳥に向かって大きな声で

「鴨ちゃん 鴨ちゃん 小がもちゃん、
グレーテルとヘンゼルが 来たけれど、
橋もなければ イカダもない、
お背中に 載せて渡してくださいな。」

白い鴨は、さっそく来てくれました。そこで、ヘンゼルがまずのって、妹の手を取ろうとすると、「いいえ。」と、グレーテルはこたえました。「そんなにのっては、鴨ちゃん、重いでしょう。別々に連れてってもらいましょ。」

この親切な鴨はむこう岸へ渡してくれました。

また歩き続けます。しばらくすると森が知っている景色になって来ました。そしてとうとう、遠くに自分たちが住んでいた小屋を見つけました。さあ、兄弟はいちもくさんに、駆け出しました。

父親は一人きりになり、ただの一ときも楽しいことがなく暗い日々を過ごしていました。母親は食べ物が十分でなく病気で死んでいたのです。

しかし、ヘンゼルとグレーテルに再び会えて、心配や苦労が吹き飛びます。大飢饉も少しず^{おさま}りつ治り、親子三人で楽しく暮らしました。